

「愛猿記賞」【大賞】

『愛猿記』を読んで」

北海道 前田恭子

文学賞のパフレットで、お顔を初めて拝見してから子母澤寛の人となりを知った。黒ぶち眼鏡の奥の瞳は慈悲深く優しい目をして、こちらを見ている。

「愛猿記」を読み始めてすぐに寛の特異さを感じた。寛は無類の動物好きであり、動物もそれに応えるようによく懐いたのである。

今から49年も前に亡くなった人が、著作からむっくり立ち上がって語りはじめた。サルも同時に氏の周りでキッキッと騒ぎ始めた。寛は生き物の心を素早く読み取る。一つ一つの声掛けが実に優しい。私も犬を飼っているので、生き物へ注ぐ愛情は人並みに持っているつもりではいた。しかしその比ではなかった。寛は本気で「人間」を敵とする猛猿に生身をぶっつけ向き合っていた。

野獣に等しいサルに上下関係を知らしめるためにとった行動には、仰天した。寛は、サルの首ねつこにかぶりついて離れなかったのだ。首はサルにとっても急所である。しばらくして首を離した時に、寛にしっかりと抱き付いてきたというサルの行動に意表を衝かれた。寛をボスと認識した瞬間でもあった。

そこからサルと暮らす愉快で賑やかな毎日が始まった。サルの想像を絶する数々の悪戯に苦戦しながらも、寛は一つ一つ知恵を絞って対処していく。寛もサルに負けない程の破天荒な悪戯心の持ち主であるのがおかしくて笑える。時には糞尿まみれになって、また時には人との生活ルールを繰り返し教えた。

この猛猿は牝で、寛の妻に時々焼き餅をやくのである。そしてある日とうとう妻に襲いかかってしまった。その時、寛は血が出るほどサルの顔面を殴った。殴られた後にサルがごめんなさいといわんばかりにペコペコ頭を下げる仕草に寛はぐっと心が詰まるのである。本気だからこそ深まってゆくサルへの情愛がよく書き込まれ私を魅了していく。

なぜ、寛はこの作品を書こうと思ったのか。同じ屋根の下で長年寝食を共に暮らしたサルが死んだ時、サルの生きた痕跡を残したい衝動はあっただろうが、果たしてそれだけであっただろうか。

肉親の縁に薄く育った寛は、動物を愛することで人知れず心の隙間を埋める作業を重ねていたのだろう。動物と真剣にコミュニケーションを深めていくうちに、そこに投影される悲喜こもごも。自分と自分を生かしたすべての人々のこと。生きるものとしてあるべき真の姿を重ね合わせていたのかもしれない。

最後の場面では泣けてしまった。サルが死ぬ直前、ボスを捜し続け部屋の扉に爪痕がたくさん残されていた。寛はあいにく留守だったのだ。その痛恨の思いこそが、「愛猿記」を書かせた源泉ではないだろうか。

猛猿という動物を介して一本のペンで『愛』の姿を究極まで表現した。エッセイを読み終えて再び見た寛の顔は菩薩になっていた。